

「北海道命名150年ー2018バスの旅」

平成30年9月15日(土)

今年本道は、「北海道」と命名されてから150年目の節目を迎えました。北海道はかつて「蝦夷地」と呼ばれていましたが、1869年(明治2年)8月15日に太政官布告によって「北海道」と命名されました。

「北海道」の名付け親と言われているのが、松浦武四郎という人物です。武四郎は、江戸時代の終わりから明治にかけて活躍した探検家で、6度に渡る蝦夷地の探査を通じてアイヌの人々とも交流を深め、蝦夷地の詳細な記録を数多く残しました。また、武四郎は蝦夷地に詳しい第一人者として明治政府の一員となり、1869年7月17日、明治政府に対し、蝦夷地に代わる新たな名称として「北海道」のもととなった「北加伊道」を含む6案を提案しました。

今回のバスの旅は150年目を迎えるにあたり、歴史的な建造物や遺構に触れ、北海道の歴史や文化、先人たちの業績を学ぶことを目的として、4つの施設を巡りましたので紹介します。

千歳水族館は、淡水では日本最大級の水槽を有し、館内では鮭の仲間や北海道の淡水魚を中心に、世界各地の様々な淡水生物を観察することができました。また、水族館の横では、インディアン水車による、千歳川を遡上する鮭の捕獲作業を見ることができました。鮭の増殖事業として、年間およそ20万尾の鮭を捕獲しており、今や千歳市の風物詩となっています。

江別市セラミックアートセンターは、北海道のやきもの文化の創造を標榜しており、北の大地に腰を据えた陶芸作家の作品が、多数展示されていました。また、江別産の煉瓦は、周辺地域の土壌に多く含まれる「野幌粘土」を原材料としており、褐色

及び赤い色が特徴的です。開拓期には、鉄道や橋などのインフラや、学校、駅舎や民家などの建物に使用され、北海道の近代化に大きく貢献しました。

北海道開拓の村は、昭和58年に開村し、54ヘクタールの敷地に52の歴史的な価値を有する建造物が、道内各地から移築または再現されました。開拓の村は、市街地群、農村群、漁村群、山村群の4つに別れており、様々な様式の建物を同時に見ることができました。開拓期の建物の佇まいを見、当時の暮らしぶりに思いを馳せるとき、先人の労苦の一端に触れた気がしました。

北海道博物館は、北海道開拓記念館と道立アイヌ民族文化研究センターを統合して、平成27年に新たに開設されました。北海道の自然・歴史・文化を紹介する道立の博物館で、自然環境と人間との関わりや、アイヌ民族の文化、本州からの移住者の暮らしなどを、調査・研究するほか、道民の貴重な宝である資料を収集・保存し、展示や教育、イベント、事業などを行う施設です。総合展示室は5つのテーマで構成されており、今回のバスの旅を締めくくるのにふさわしい展示内容でした。



(前
つづ
そ
おき、「江」
京極家
られた

篇からの
き)
れはさて

程を整理すると次のようになる。

が丸亀
に伝え
過

建礼門院右京大夫が見た平家の人々 —素顔の貴公子たち—(その1)

〈『平家物語』を読む会〉 村山功一

はじめに

『建礼門院右京大夫集(けんれいもんいんうきょうのだいぶしゅう)』という歌集があります。“建礼門院(平清盛の次女徳子・高倉天皇妃・安徳天皇の母)に仕えた右京大夫の歌集”のことです。

この場合の大夫は“だいぶ”と読み、“たゆう(大夫・太夫)”とは異なります。“だいぶ”は職(しき=朝廷の役職の一つ)の長官の呼び名で、右京大夫は右京職(右京の行政、治安などの実務にあたる職)の長官という意味です。しかし、この歌集の作者《右京大夫》(以下まぎらわしいので、作者を示す場合は《右京大夫》とします)が、右京の長官だったわけではありません。天皇、皇后、皇族に仕える女性を女房と言います。女房になるためには様々な制約がありますが、貴族の娘であることが第一の条件でした。女房は“女房名”が付けられますが、これにも細かい規定があります。中宮(皇后か皇后候補)に仕える女房は召名(めしな)を付けます。この場合、その女性の親族・近親者である男性の官職名を名乗るのが投的でした。作者の親族・近親者で右京大夫を務めた男性は三人います。一人は甥の藤原行能。一人は曾祖父藤原定実。そしてもう一人は当代随一の歌人藤原俊成です。現在では、作者が召名とした右京大夫を俊成とする説が最も有力です。ただし、作者は俊成の実子

ではありません。

実は、作者の母夕霧は俊成との間に一子をもうけましたが、その後その子を連れて藤原伊行(これゆき)に再嫁(再婚)して生まれたのが作者《右京大夫》です。作者は当時右京大夫であった俊成の養女として出仕(宮中に仕えること)したので、俊成の官職名を召名としたというのが、現在では定説となっています。その根拠として、この歌集に「俊成九十賀(九十歳の祝賀会)」に関する記事があること、また作者が俊成の子定家から『新勅撰集』撰出のために資料の提供を求められたとの記載から、俊成家との特別な関係があったのだろうと推定しています。

◆《右京大夫》の家系

作者の父は藤原伊行(これゆき)といい、“三跡(平安初期の三人の書の名人)”の一人藤原行成の六代の後裔にあたります。代々この家系は能書(著名な書家)として名をなし、この一族を世尊寺流(家)と言います。伊行は能書であるばかりか、文芸方面にも造詣が深く我が国最初の『源氏物語』の注釈書『源氏釈』を著したり、『伊勢物語』の本文研究で知られた人物と伝えられます。

一方母夕霧の家系大神家は、代々“伶人(れいじん=宮中で雅楽の演奏を担当する)”を務める音楽家一族です。夕霧自身もちろん琴の名手として知られていまし

こうした両親のもとで、《右京大夫》も多様な教養や技能を身に付けて成長したと思われる。また、家柄からしても女房に上がる条件は十分満たしていると思いますが、定説のように、俊成の養女になったのは、その方がより有利だということだったのでしょう。つまり、俊成は平家一門に強力な人脈を持っていたからだと考えられます。平家随一の歌人薩摩守忠度が俊成に師事していたことはよく知られていますが、このほかにも多くの平家の公達（若君）が、俊成やその子定家のもとで和歌の指導を受けていたのではないのでしょうか。こうしたことが有利に働いた可能性は十分あるでしょう。もちろん、そればかりではなく俊成が《右京大夫》の才能を、高く評価して養女としたことはいうまでもありません。

こうして《右京大夫》の、憧れの宮廷生活が始まります。承安三（1173）年、作者十九歳の頃と推定されています。

◆『建礼門院右京大夫集』の特色

この歌集は《右京大夫》が高倉天皇の中宮徳子に仕えていた約5年間に、折々に詠んだ歌、また退仕の後や後鳥羽院（安徳天

皇の異母弟）の頃の再出仕時代の歌などを、晩年にまとめたものです。この歌集の大きな特色は、時に散文かと思うような長く、詳しい詞書（ことばがき＝歌の前後に置かれる一種の説明文）を持つことです。これを読むことで作者が身を置いた中宮徳子を中心とした宮廷世界の様子、“中宮文化圏”に集う人々のありさまを歴史的証言の一端として受け止めることができます。

この歌集は、すべてではありませんがその中心は《右京大夫》の恋人平資盛への想いとその回想です。作者にとって徳子に仕えた5年間の思い出は、そのほとんどが資盛との思い出と重なります。

それはともかく、私たち『平家物語』を愛読する者としてこの歌集が重要なのは、そこに、作者の眼で見、会話を交わし、歌の贈答をした平家一門の人々が描かれているからです。もちろん『平家物語』は平家の人々を描きますが、それは必ずしも“実像”ではなく多分に潤色され、或いは美化され、或いは貶められた“物語”の中の登場人物です。その点『建礼門院右京大夫集』（以下『右京大夫集』とする）が描く一門の貴公子は、ほぼ実像と考えていいのではないのでしょうか。ただし、作者《右京大夫》の眼を通した人物像である以上、主観的、情緒的であることは否定できません。そこには作者の好みや交流の親疎といった面も反映されていることとします。しかし、これらを割り引いたとしても、伝聞や伝承によらない貴公子たちの素顔であることは、間違いないでしょう。

以上のように、このレポートでは《右京大夫》が見た一門の人々について紹介します。したがって『右京大夫集』の文学的考察や歌の解釈・鑑賞などはしません。『平家物語』との対比は適宜行いますが、できるだけ簡潔であるように努めました。



京極読書新聞の「創刊号」の巻頭言です。

京極読書新聞の今月号が第100号となることから、平成20年12月に発行された「創刊号」を読み直してみました。発刊の辞では、湧学館の大きな行事がある度に、読書新聞を発行することとし、「創刊号」は京極中学校への第1回の出前図書館に合わせて、作成したと述べています。およそ10年が経過した今、ここに「創刊号」の巻頭言を再掲載しますので、往時の新聞創刊に対する思いを、味わっていただきたいと考えています。

少し歯ごたえのある小説を読もう！

湧学館 新谷 保人

中学生だった時に読んだ本の中には、その時には、何が書かれているのかまるでわからず、放り投げてしまった本がいくつもあります。そんな本でも、時間がたって、たとえば、大学の自由な時間がいっぱいある環境の中で、その本を落ち着いて読み返してみれば、「なあーんだ、こういうことだったのか！」と一気に氷解することもあります。結婚し、子どもが生まれて、子育てにあくせくしている最中に「ああ、あの小説のヒロインの感情は、これだったのか！」と気がつくこともありました。

本が読めないということ、そんなに気にすることはありません。言葉を知らないのは誰でも同じです。みんな、本を読む中で

言葉や使い方を憶えてゆくのですから。

若くて、未熟で、理解できなかった本も、大人になって読み返せばすっきりわかり感動することもあります。けれど、若い時に本を読まなかった人は、お金も時間も自由に使える大人になっても、本の世界には戻ってこないでしょう。「読み返す」ということができないから。

心に「読んだけれどわからなかった」という傷がない人は少し退屈。「俺はなんでもわかっている」といった態度が、他人の目にはものすごく不自然に映ります。



発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158
番地1
TEL 0136-42-2700(代表)

ホームページもご覧ください

